の飛脚が急遞鋪兵或は急遞鋪丁と稱するものに當ることは一點の疑もないことである。オドリク（Friar Odoric）もその紀行に馬站を記し、ついで飛脚差立の有様を述べて、

ある特定の飛脚が常に Chidebeo といふ驛舍に住んで居る。彼等は幾つもの鈴を附けた帶を締めて居る。これ等の驛舍相互の距離は大低三哩ばかりである（Yule, Cathey, vol. I, 138; New edition, vol. II, 232-233）

というてゐる。この chidebeo といふ名については、ユールは註釋を加へてロフ王（Shah Rokh）の紀行に見える kidifu はこれであるが、その語原は知らない、たゞイブン・バッタ（Ibu Batuta）が印度の遞驛を dáwuh と呼んで居るのは、多分 kad-i-dáwuh であらうというて、オドリクの kidebeo もこれに關係があるだらうとの意をほのめかし、コルディェ（Cordier）は曾て ki は寄・羈等に當り、fou は夫であると見たが、その後シュレーゲル（Schlegel）がロフ王の kidifu は急遞鋪であるというたことを Cathay の新版前記の個處に增註してゐる。余は前に驛傳考を草した時に、シュレーゲルの所論には氣づかなかつたが、chidebeo も kidifu も共に急遞鋪の音を訛つて傳へたものに外ならぬことを述べて置いた。[3] ロフ王の記事にも kidifu は yam（即ち站）と yam との間に在ると記され、またその相互の距離を 10 mereh といひ、16 mereh が 1 parasang に當るというてゐる。

これ等の記事に依つて、急遞鋪の置かれた道筋は決して特にこれが爲に開かれたものではなく、站の置かれてあつた道筋をそのまゝこれに用ゐたものに外ならなかつたことを明瞭に知り得られるであらう。こゝに印出された永樂大典の中には、その卷一萬九千四百二十六に析津志の站に關する部を收め元代に站の置かれた道筋を一々掲げてある。この道筋が即ち當時の最も重なる通路たる孔道であつたに相違なく、さうして急遞鋪もまたこの孔道に置か